様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年 １０ 月 ２７ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2015
課題番号：２６７７００５１

研究課題名（和文）美術作品の制作・流通における人的ネットワークの役割：ヘルドルプ一族の事例を中心に

研究課題名（英文）Functions of personal relationships and networks in the production and distribution of art works: focusing on the case of Geldorp Gortzius and his two sons

研究代表者
河内　華子（Kawauchi, Hanako）

大阪大学・文学研究科・助教

研究者番号：２０７０９５３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、ネーデルラント出身芸術家であるヘルドルプ一族を例に、八十年戦争の混乱を背景に国外に移住した芸術家たちの活動における人的ネットワークの役割を考察するものである。初年度は第一世代であるヘルドルプ・ホルツィウス、次年度は第二世代であるゲジョージ・ヘルドルプおよびメルヒオール・ヘルドルプに関して、作品と文字史料の両面から調査を行い、ケルンおよびロンドンにおけるネーデルラント移民コミュニティにおける彼らの役割を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study aims to explore the function of personal relationships and networks for Netherlandish immigrant artists during the Dutch Revolt. We focus on Geldorp Gortzius who migrated form Antwerp to Cologne, and his two sons one of whom worked in Cologne and the other in London. Using the text and image materials we shed light on their activities in the communities of Netherlandish immigrants in these two cities.

研究分野：美術史学

キーワード：ネーデルラント　ケルン　ロンドン　ネットワーク

１．研究開始当初の背景
オランダ独立戦争の前半期、より具体的には第一次イコノクラスムの勃発（1566 年）から十二年の休戦条約の締結（1609 年）にかけての時期は、ネーデルラント美術史において「ブリューゲルとルーベンスの間」と通称され、見るべき才能の持ち主が現れなかった停滞期として長く等閑視されてきた。その理由の一端は、この地域の芸術の中心地であったアントウェルペンの政治的・経済的な混乱を背景に、相当数の芸術家が国外に流出したことに求められる。故国を離れ、ときに複数の国や地域にまたがって活動したこれらの芸術家は、しばしば出身国と移住先のどちらの研究者からも十分な関心を向けられることなく、未だ基礎研究すら行われていない例が多く見受けられるのである。しかし、初期近代におけるネーデルラント美術に対する需要の増大と国際的な評価の高まりに目を向けるとき、こうした移民芸術家の存在はきわめて大きな意義を持つものと考えられる。彼らによって 16 世紀後半にいわばネーデルラント美術の“直輸出”が行われたことは、一方で 16 世紀前半のアントウェルペン美術市場の隆盛がもたらした成果を継承するものであり、もう一方では 17 世紀初頭の南北ネーデルラントの各都市における新しい美術市場の勃興を準備するものとなったためである。
申請者はこのような関心に基づき、ケルンで活動した南ネーデルラント出身の肖像画家ヘルドルプ・ホルツィウスをテーマとする博士論文を執筆中である。新しい土地で一定期間にわたって活動しようとする際、有力な顧客やパトロンの存在は不可欠といえる。ヘルドルプの注文主に関する調査を進める中で見えてきたのは、芸術家―注文主という関係に限定されない、より多面的でプライベートな人間関係であった。そこには、従来指摘されてきたケルンの地元の有力者たちだけでなく、複数のネーデルラント移民の芸術家や商人の一族が含まれ、友人関係（vriendschap）　血縁関係を基盤にした広範囲かつ重層的なネットワークを形成していたことがうかがえる。申請者は、こうした同業者や顧客のネットワークが、新天地で足場を築く際に重要な役割を果たしたと考えている。ヘルドルプおよびその息子たちの事例を通して、この時代の移民芸術家の活動における人的ネットワークの実態と機能を明らかにしたいと考え、本申請を行った。

２．研究の目的
本研究の目的は、移民芸術家の活動における人的ネットワークの機能を実例に即して明らかにすることである。
近世ヨーロッパにおいて、家族や親しい友人など最も身近な人間同士によって構成される「第一次集団」のネットワークは、経済・社会活動の様々な局面において本質的な役割を果たした。芸術家の場合、工房の多くは家族経営であり、同業者との縁組を通じて技術や顧客の共有・拡充を図ることが頻繁に行われていた。芸術家の父親や親族を持つ者は彼らのもとで最初期の修業を行うのが常であり、独り立ちした後も、血縁関係や友人関係のつてを通して作品の注文がもたらされることがままあった。つまり、一見きわめて個人的で範囲も狭いように思われる「第一次集団」のネットワークは、実際には経済活動の根幹を支える重要性を持っていたということができる。特に移民芸術家たちにとっては、こうしたネットワークの有無が活動の成否を分けたといっても過言ではない。
本研究は、このような関心に基づき、17 世紀にケルンを拠点に活動した肖像画家ヘルドルプ・ホルツィウスとその二人の息子たちの事例を取り上げ、芸術作品の制作・流通における人的ネットワークの実態解明のためのケーススタディを提示することを目的とする

３．研究の方法
研究方法は、ヘルドルプ一族の第一世代（ヘルドルプ・ホルツィウス）および第二世代（ジョージ[＝ゲオルク/ヨーリス]・ヘルドルプ、メルヒオール・ヘルドルプ）に関する ①文字史料 ②画像史料 の収集と分析を中心とする。
①に関しては、主にケルン歴史古文書館（ケルン）（※2009 年の倒壊事故の影響により、マイクロフィルムおよび史料集成を利用）、ノルトライン=ヴェストファーレン州古文書館[Landesarchiv NRW]（ブリュール、デュイスブルク）、アントウェルペン市立古文書館[SAA]（アントウェルペン）、イギリス国立公文書館[TNA]および議会公文書館（いずれもロンドン）での調査を行った。
②に関しては、オランダ国立美術史研究所（デン・ハーグ）とナショナル・ポートレート・ギャラリーのフォトテーク（ロンドン）において計数百点の画像資料を収集したほか、特に重要ないくつかの作品については、ブダペスト国立絵画館、プラハ国立美術館など所蔵先を直接訪れて実見調査を行った。

４．研究成果
（１）第一世代―ヘルドルプ・ホルツィウス
①文字史料の調査
これまでの調査で明らかとなった古文書史料のうち、ヘルドルプの名前が言及されるものはきわめて限られており、参事会名簿を除くと現時点では以下の 2 件のみを挙げることができる。
・出版業者ペーテル・オーフェラート(Peter Overadt)の子供の洗礼の立会記録(NRW, Personenstandsarchiv, LK187, S.20, 1611.03.06.)
・セヴェリン・ハック（Severin Hack）とカタリーナ・ヴァルレト（Catharina Varlet）

の婚姻の立会記録(NRW, Personen-
standsarchiv, LK225, S.71, 1618.01.02.)
前者は1606 年から13年頃にかけてヘルドルプの原画に基づく版画を多数出版している出版業者との直接の交友関係、後者はヘルドルプの顧客との交友関係を示す史料として重要である。特に後者に登場するセヴェリン・ハックという人物はヨーリス・ハックの息子と記録されており、このヨーリスは、カーレル・ファン・マンデルがヘルドルプの伝記中でこの画家の《福音書記者》の所蔵者として挙げている美術愛好家ヨーリス・ハック（“Iooris Haeck”）と同定して間違いないものと思われる。当該の記録はケルンにおけるオランダ語圏ネーデルラント移民のための改革派教会の婚姻録であり、1590 年代から1630 年代にかけて 10 数件のハック姓の人物の記録が確認できる。これまでの調査により、ヘルドルプの顧客の中に相当数のネーデルラント移民が含まれており、その多くが改革派共同体に属していたことが明らかとなっているが、今回の調査により、新たにハック一族もこのグループに属することが明らかとなった。同時に、この記録および現在知られる作品の年記を鑑みて、これまで不明確であった画家の没年が 1617 年である可能性がきわめて高くなったことは重要である。

②作品調査
デン・ハーグおよびロンドンのフォトテークにおいて集中的な調査を行った結果、基準作のひとつである《スザンナと長老たち》(ブダペスト国立絵画館、 Inv. Nr. 86.3）の習作(個人蔵、RKD beelddocumentatie)において、ミヒール・コクシーに帰属される同主題作品(カールスルーエ、クンストハレ、Inv. Nr. 167)からの引用が行われていることが明らかとなった。その手法は、コクシー帰属作品の一部をトリミングして基本の構図を作り、そこに別のソース（おそらくトローニー）から複数の頭部を付け加えて新たな構図を組み立てるというものである。このような引用の仕方は同時代において珍しいものではなく、ヘルドルプの直接の師 2 人が学んだフランス・フローリス工房でも実践されていたことが同時代の記述から明らかとなっていることから、おそらくアントウェルペンでの修業時代に身につけた手法であったものと思われる。申請者の把握する限り、同様の手法によって成立した可能性がきわめて高い作品が他に少なくとも 2 点存在する。今回の調査では実現しなかったものの、それらの着想源についても特定することができれば、引用元作品の範囲やどのようなルートでそれらを目にし得たかなど、ヘルドルプの作品の制作方法についてさらに多くを明らかにできるものと期待される。
同時に、ケルン移住後の作品にネーデルラント出身画家の作品からの明らかな引用がみられる事実は、両地域の芸術上の交流を考える上でも興味深い。これらの調査結果の一部は５.に挙げた論考および発表によって公にした。
また、申請期間の終盤にヘルドルプによるティツィアーノ作《ヴィオランテ》(*Violante*、ウィーン美術史美術館）の模写（Versailles Encheres S.A.R.L, 2015.12.06, lot.20）の存在が明らかとなったことを受け、画家がネーデルラントだけでなくイタリア出身画家の作品も参照していた可能性を明らかにした（例：《ディアナ》、Christie’s London, 1975.07.11, lot.52)。これに関しては、ヘルドルプがどのようなルートでティツィアーノ作品（のコピーもしくは版画）を目にすることができたのかという根本的な問題が明らかになっていないが、ひとつの可能性として、ケルン-ヴェネツィア間の交易に携わっていた豪商の仲介が考えられる。ヘルドルプの重要な顧客の中には、デル・プラート(del Prato)／ペリコルネ(Pellicorne)一族のようにヴェネツィアに拠点を持つ大商人たちが見受けられ、その関係先には画商・収集家として知られるファン・ウッフェル（Van Uffel/Uffelen）一族が含まれていることを考えれば、このルートでイタリアの作品の輸入が行われた可能性は十分に考えられよう。この問題に関しては、未だ検証が必要な事柄がきわめて多く、研究期間内に発表することはできなかったものの、現時点での仮説についてベルギーの大学における研究会（ルーヴェン・カトリック大学、2016.06.10）において発表した。

（２）第二世代―ジョージ（=ゲオルク/ヨーリス)・ヘルドルプおよびメルヒオール・ヘルドルプ
①文字史料の調査
ジョージ・ヘルドルプについては、すでに先行研究においていくつか断片的な情報が明らかとなっている。それらの多くは、画家としての活動ではなく、チャールズ一世のコレクション管理者およびロンドンにおけるネーデルラント出身芸術家コミュニティの世話役としての活動に関するものである。特によく知られるファン・ダイクの例以外にも、コルネリス・ファン・プーレンブルフ、アレクサンダー・ケイリンクスらとの交友関係を示す史料(TNA, C10_67_59 および C56_7_64)の分析から、ロンドンに移り住んだネーデルラント出身の芸術家たちに対して、当面の住居を世話するなどの援助を行っていたことが明らかとなった。これに加え、今回新しく見つけることができた史料としては、画家兼美術商レミギウス・ファン・レームプトとの関係を示すもの（TNA, C5/23/112）が挙げられる。この史料により、ファン・レームプトがジョージの娘婿であり、絵画のほかにラピスラズリなどの高額な絵画素材の取引に携わっていたこと、さらにジョージがロンドン移住後もアントウェルペンに土地と邸宅を

所有していたことなどが明らかとなった。
1630 年代までケルンでの活動が跡付けられるメルヒオール・ヘルドルプについては、版画家フランス・ホーヘンベルフの親族（おそらく実娘）との結婚に関する複数の記録（NRW, Personenstandsarchiv, LK54）により、版画家ペーテル・イッセルブルク（Peter Isselburg)、画家ヒエロニムス・ファン・ケッセル（Hieronymus van Kessel）との交友関係がすでに明らかとなっているが、新たな史料として、1614 年時点で少なくとも１名の弟子を抱えていたことを示す史料（NRW, Personenstandsarchiv, Jülich-Berg II, Nr.2851）を見つけることができた。

②作品調査
第二世代の二名に関しては、いずれも確実に真作と認定できる作品がごく少数しか知られていないものの、以下の２点を指摘することができる。まず、メルヒオールはケルンを拠点に活動したことからも裏付けられるように、ヘルドルプ・ホルツィウスの後継者の位置づけにあり、父の作品のコピーを多数制作したと考えられる。今回の調査で、ヘルドルプ工房に由来するとみられる作品約 20 点の情報が入手できたが、それらのいくつかはメルヒオールの手になるものと思われる。次にジョージに関しては、ロンドン移住後の作品が数点と、版画でのみ知られる作品数点が挙げられる。すべて肖像画であり、少なくとも絵画に関しては明らかにヘルドルプの作風を受け継いでいることが指摘できるが、同時代のイギリスの肖像画形式に則って全身像と風景描写を特徴とする。風景描写は明らかに別人の手になるものと考えられるが、ロンドンにおける交友関係が立証できる前述の風景画家ファン・プーレンブルフおよびケイリンクスの関与は様式的にみて除外せねばならない。

本研究で明らかとなった以上の事柄を踏まえて、改めてヘルドルプ一族のネットワークについて集約する。
① ケルン、ロンドンいずれにおいてもネーデルラント出身者のコミュニティが存在し、移住先での活動の出発点において重要な拠り所となっていたことがうかがえる。ヘルドルプ・ホルツィウスの場合、自身はカトリック教徒としてケルンの市当局と良好な関係を築き、後には参事会員に選出されるような立場にありながら、一方で改革派教会に属する、つまり市当局の監視の対象となり得るネーデルラント出身者たちとの関係も保っていたことがうかがえる。さらにその後継者であるメルヒオール・ヘルドルプの代には、ホーヘンベルフ、オーフェラートらの出版業者および画家ヒエロニムス・ファン・ケッセルら、ケルンで活動した同業者との結びつきが強化され、一定の規模を持つ工房が形成されていたことがうかがえる。ジョージ・ヘルドルプの場合は、ネーデルラントからロンドンに移り住んだ芸術家たちに当面の宿泊先を提供したり仕事の仲介をすることでコミュニティの中で重要な地位を獲得していた。
② 同時代のほとんどの職業に共通してみられる傾向であるが、婚姻関係においては、移民芸術家の間においても同国人・同業者のつながりが重視されたことがうかがえる（メルヒオール・ヘルドルプは版画家ホーヘンベルフ一族の娘アグネスと結婚、ジョージ・ヘルドルプはアントウェルペンにおいて画家ウィレム・デ・フォスの娘アンナと再婚)。
③ 実際の作品の流通において特に重要な役割を果たしたのは版画家と出版業者であり、メルヒオールの事例が示すように彼らと婚姻を結んだり、洗礼・結婚等の重要な儀式の立会を務めたりなど緊密な関係を築こうとする傾向が顕著にみられる。
④ ヘルドルプ・ホルツィウスの作品における引用の事例から考えて、ケルンにおいてアントウェルペンやヴェネツィアで制作された作品のおそらくコピーを入手できる状況にあったものと思われる。この点に関しては、未だ実例に即した裏付けが得られていないが、芸術家・画商のネットワークが存在したものと思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）
「ヘルドルプ・ホルツィウス作《スザンナと長老たち》―成立過程の再構成と〈切り詰められた構図〉の意図」、『民族藝術』第 32 号、民族藝術学会、2016 年 3 月、163-169 頁（査読有り）。

〔学会発表〕（計１件）
「ヘルドルプ・ホルツィウスのケルンにおける活動：八十年戦争期におけるネーデルラント芸術家の離散(ディアスポラ)と人的ネットワーク」、第 64 回ベルギー研究会、神戸大学ブリュッセルオフィス、2016 年 3 月 3 日。

〔図書〕（計 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
河内　華子　（KAWAUCHI, Hanako）
大阪大学・文学研究科・助教
研究者番号：20709539

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：